



わらべ歌にみる塩つけ豚 肉食民族の知恵にじませ

ヨーロッパのわらべ歌には、歴史や伝統を深くにじませたものが多い。たとえば、フランスのわらべ歌にこんなものがある。

あるとき、三人の子供が森の中で道に迷った。夜になって、それとは知らず、とある肉屋に一夜の宿を乞う。ところがこの肉屋は、とんだ悪魔の使いで、三人の子供をつぎつぎとサロワール（塩つけ用のカメ）に投げ込んでしまう。そして、七年がたった。ある日、そこへサント・ニコラ（子供の守り神様）がやって来て、サロワールのふちに腰をかけ、肉屋に「プティ・サレ（豚の塩つけ肉）をくれ」とのたまう。肉屋は悪事がばれるのを恐れて、真つ青になって森へ逃げ込んだ。

神様がサロワールのふちをとんとんお叩きになると、中の子供の一人がむっくりと頭をもたげて「ああー！よく眠った」とのびをする。ついで、二人目も目をこすって「あたしも、よく眠ったこと」。三人目は「わたしは天国にいるのかと思った」と、三人そろってここに顔で目をさます——というのがストーリーである。

肉屋が悪者扱いになっているのが、ちょっと気になるところだが、ここで「サロワール」が出てこないことには話そのものが成立しないので、肉屋は話の都合上の悪役と理解すれば、

なかなか文化度の高いわらべ歌と見受けられる。

まず、この歌からうかがえることは、プティ・サレ、すなわち豚の塩つけ肉は、七年とまではゆかないまでもかなり保存のきくものらしいこと。

ついで、この歌がつけられたころは、かつての日本で家ごとに「手前みそ」や漬け物などを作っていたように、当時のヨーロッパでは、どこの家でも豚の塩つけ肉やハム、各種の腸づめなどを作っていたらしい。

その塩つけ肉のための「カメ」は、子供が三人ぐらい入ってしまうほど大きなものだった——ということである。

事実、毎年、秋の終わりに、来るべき冬のために豚を殺して越冬用の食糧に充てたヨーロッパでは、豚は泣き声のほかは捨てるとうるがなないといわれるぐらい徹底的に利用したから、解体された豚肉を保存するためには、このくらの大きなカメは常識だったのだらう。そして、母親たちは、日常の塩つけ豚づくりにこよせて、子供たちにもあまりおそくまで遊びまわることの危険を教えたのである。